



TITLE:

我が國民經濟の實相

AUTHOR(S):

山室, 宗文

CITATION:

山室, 宗文. 我が國民經濟の實相. 經濟論叢 1929, 29(1): 89-117

ISSUE DATE:

1929-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129766>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第

卷九十二第

行發日一月七年四和昭

論 叢

消費税の目的及物體

法學博士

神戸 正雄

勞銀の理論

文學博士

高田 保馬

說 苑

ケネーの租税理論

法學士

山口 正太郎

セイの販路說に就て

經濟學士

谷口 吉彦

シュビイトホフの景氣循環論

經濟學士

靜田 均

講 演

我國民經濟の實相

法學士

山室 宗文

雜 錄

再び佐田介石に就いて

經濟學博士

本庄 榮治郎

プロイセンの地方税制

經濟學士

安田 元七

動大量と靜大量

經濟學士

木村 喜一郎

輓近フランス經濟學界の傾向

經濟學士

松岡 孝兒

最近英國に於ける豫算の業績

經濟學士

中川 與之助

近著外國經濟雜誌主要論題

講演

我が國民經濟の實相

山 室 宗 文

今日お話を申上げるとは我が國民經濟の實相と云ふ題を設けたのであります、國民經濟と云ふ言葉は學問的には色々の意味があると思ひますが、私の國民經濟と茲に申します意味は、吾々が個人として經濟を營んで居ります所謂個人經濟、それから吾々國民が共同生活を致して、其共同生活の福祉を増進致します爲めに、國家の經濟或は地方團體等の經濟即ち財政を營んで居る、此個人經濟並に國家財政と離れて私共國民が全體として吾々の衣食住の必需品をどこから得て、どう云ふ生活をして居るか、衣食住の生活必需品ばかりでなく吾々國民全體の福祉を増進する爲めに要する物資を如何にして供給して居るか、斯う云ふことを私は國民經濟と名を付けたのであります。

それで國民經濟と云ふのはさう云ふ意味でありますから、苟も吾々が單獨に此世の中に生活して行くことが出来ない、國家を形成して其國家と云ふ共同團體の一員として經濟を營んで行かなければならぬとすれば此の國民經濟と云ふものが、吾々の共同生活である所の國家の財政或は公共團體の財政、或は又個人個人が營む所の私經濟に於きましても總て是等のものが國民經濟に適應するやうにして行かなければならぬ、國民經濟の範圍に營

まなければならぬと云ふことから、私は國民經濟の研究と云ふことが、最も大切な事であると思つて居るのであります、よくあの人は贅澤な生活である、或は大變勤儉な生活をして居ると云ふやうなことを申しますが、其の標準は個人經濟に於きましては其人の收入であつとか、財産であると云ふものが標準になるのであります、國家の財政例へば吾々が十七億五千萬圓以上の豫算を以て、國の財政を營んで居るが、さう云ふ財政は果して我國にとつて尨大の豫算であるか、或は國民經濟に適當なる豫算であるかと云ふことの標準を、吾々はどこかに置いて考へなければならぬ、さう云ふことを考へまして、茲に國民經濟と云ふものを諸君に能く御諒解を願ひたいと思ふのであります。

それならば其の國民經濟と云ふものはどう云ふことになつて居るか、何を國民經濟の基礎とし、或は國民經濟の根柢となるものは何であるかと云ふことを申上げなければならぬのであります、先づ何人も考へるのは國の富であります、一國の國富が其國の國民經濟の基礎となるや否やと云ふことであります、個人經濟に於きましては固より其財産は大體に其人の經濟、或は生活の標準となつて居るのであります、或は十萬圓であるとか二十萬圓であるとか云ふ資産を持つて居るならば、それに相當なる生活をすれば宜い、所が國家は多少それと違ふことがあると思ふのであります、個人經濟ならば或は地面を持つて居る、其地面の價格が假りに十萬圓あるとしますれば、其十萬圓から相當の收入があります、又た土地を遊ばして居るならば市街の宅地でも收入がない、併し個人經濟ではそれを賣れば直に金になります、さうして其金で有價證券を買つて其收入で生活すると云ふやうなことが出来るのであります、所で國家の國富の主なるものは何かと云ふと、大體は土地であります、所が此土地はどうも賣る譯にゆかない、一部分は賣ることが出来ませうが、國全體の地面を賣ると云ふことは、國家の存立を無くする譯である、それは土地に付て申すのでありますが、土地以外の物でも大體國家全體の所謂國富を形造

つて居るものは、如何に値打がありまして、それを右から左に處分すると云ふことが困難なものが多いのであります、又縦し處分し得るものでも、之を評價すると云ふことも頗る困難である、それで國の富がどれだけの有るか云ふ計算も決して正確なものではないと思ひます、縦し正確であつても國の富と云ふものは、必しも其國民の生活の資源として直接の關係がない、國の富からは生産の出来ないものが澤山あります、それで假りに内閣統計局で發表致されて居る國の富が一千二十三億圓である、さう云ふ一千二十三億と云ふ數字を見ても、それがどれ位の收益を得るものであるかと云ふことを知らなければ、吾々の國家の財政又は個人經濟の標準にはならない、それで國富と云ふものは無論其國の財力、或は其國の經濟力を或る意味に於ては代表するかも知れませぬけれども、吾々の個人の生活でも、國家の生活でも其國富の割合で其の適否を定めようとした所でそれは必しも當らぬ、それでどうしても吾々の國民經濟の基礎、根源となるものは、國の生産力でなければならぬ、我が國民全體として、年々どれ位の生産をやつて居るか云ふことが根本であります。

それでは生産力と云ふものはどうして分かるか、是も中々分り兼ねることでありまして、併し色々の方法で之を算出致されて居るものもあります、先づ我國民全體の生産の總額或は見方を變へて言へば國民の總所得、どれ位の收入を得て居るか云ふ事でありまして、私は昨年夏でありましたが、此國民の總生産力を主として我が國に於ける生産物の價格を標準として計算を致して見たのであります、それは昭和元年度に於ける農産物、水産物、畜産物、林産物、礦産物それからもう一つ工業の産物、斯う云ふものゝ統計は農林省、商工省から出て居ります。其生産物の數量の統計を出来るだけ正確と思はれる價格に直しまして、さうして我が國の生産物の全價格を算定致したのであります、其の細かい數字は一々ありますけれども、全體の數字は百三十三億九千一百萬圓となつたのであります、即ち吾々が一ケ年に生産する物資の總價格が百三十三億九千一百萬圓、斯う云ふことになつ

たのであります、丁度其數字を私が出しまして、間もなくであります、昨年十月二十一日であつたと記憶致しますが、内閣統計局に於て國民の總所得と云ふものを發表されたのであります、其國民の總所得は主として所得税調査の元である國民所得を基礎とされたのであります、所得税の免稅點以下のものに付てもそれ〴〵の方法を以て算出されて、是も内容は官有財産、公共團體の收入或は個人の所得等色々な分類がありますが、其合計が百三十三億八千二百萬圓、是は大正十四年度の計算であります、私の生産物の價格として計算致しました時よりも一年以前の數字であります、それで私の計算致したのは全く生産物を標準として計算をした、所が一方は國民の收入を國民の總所得として計算して、其數字が今申上げる通りに一方は百三十三億九千一百萬圓他方は百三十三億八千二百萬圓でありますから、僅かに九百萬圓、一千萬圓足らずの違ひであります、固より是は双方共非常に正確なものとは思はれませぬけれども、兎に角偶然に百三十三億は全く符合して居ります、それで國民所得或は國民の全生産力と云ふものは、先づ大體百三十三億圓であると云ふことは、想像して誤らないと思ふのであります。

さうしますると國民全體で百三十三億圓の生産力有りと致しますれば、一人でどれ位の生産をして居るか、是は國民所得の總額に就ては内閣統計局の調べは一人一ヶ年の所得は二百二十四圓となつて居ります、然し私人所得のみについて云へば一人當り二百十七圓となつて居ります、何れにしても二百二十圓前後の收入であります、さうすれば吾々の一月三人とか四人とかと云ふことにしまして千圓足らずの一ヶ年一戸の收入であるとしなければならぬのであります、是も内閣統計局から個人所得の一世帯當り千八拾九圓と發表されて居りますが、何れに致しましても千圓内外が吾々一戸の平均收入であります。

序でに内閣統計局で發表された歐米諸國との比較があるのでありますが、日本は一人當り二百十七圓である

が、英吉利は九百七十七圓、亞米利加は千二百七十二圓、佛蘭西が五百四十九圓で何れも一人當りの収入は我國より三倍乃至五倍の收入であります、御承知の通り歐洲大戰で長い間非常に苦しみましたる獨逸にありまして一人一ヶ年の収入は三百九十八圓になつて居ります、日本よりも約二倍である、固よりは數字の基礎が必ずしも同じ方法を以て算定したのでありませぬから、正確な比較は出来ないのですが、先づ歐洲諸國の一人の生産力は、吾々よりも英、米、佛等は三倍乃至五倍、獨逸でも二倍、斯う云ふ概念は得られるのであります、是等を比較致しまして吾々の生活、外國人の生活、吾々の國家の生活、外國の財政其他國家の色々の施設等を比較する上に於て大體の標準々其邊に置くと云ふことは、有ゆる問題を研究し討究する上に於て必要なことと思ふのであります。

それで今度は吾々の生活狀態になるのであります、今申上げる通りに吾々の生産力は一人が一年に二百十七圓、先づ一家千圓としますが、さうすれば平均一ヶ月の收入と云ふものは八九十圓にしかならないのであります、所が私共の日常生活の常識から考へて見ても、八十圓とか九十圓とかと云ふ一家の收入でやつて行くと云ふことが平均の經濟である、平均の生活狀態であると云ふ風には實は思へない、もう少し吾々の生活の程度が高くないかと云ふことを直ぐに感ずるのであります、どうも月に八十圓、九十圓と云ふ生活は、餘程下層社會の生活であるやうに思ふのであります、下層社會と云ふのは諸弊があるか知れませぬが、一人兎も角も二百十七圓と云へば一ヶ月僅かに二十圓足らずで、十八圓位になりますか、さうすると一日六十錢である、どうも私は一人の生活として是が平均であるやうには思へない、少し日本の生活狀態は是よりも高くはないかと思ふ位に感ずるのであります。

何れに致しましても吾々は、斯う云ふ國家の經濟生活を營んで行く上に於て、國全體としてどうしても國民所

得、今お話しました百三十三億圓、假りに數字を擧げて置きますが、其國民の生産力の範圍に生活をしなければならぬ、其範圍に自給自足の生活をして行かなければならぬのであります、固より全生産力の範圍に於ける自給自足の生活と云ふことは、何も外國と交通せずに分の生産した物のみで生活して行くと云ふことではないのであります、世界各國共通、有無相通じたる經濟生活をやると云ふことは、世界各國民の福祉増進に大切なことであります、是はやらなければならぬ、併し私の言ふ自給自足の生活と云ふのは、吾々國內に生産するものゝ範圍に於ての生活、吾々の生産したものを外國に輸出して、さうして吾々に必要なものを外國から輸入するのは宜い、其の輸出入を平均して行けば吾々の生産の範圍に生活すると云ふことになる、それから又單に吾々が輸出する品物だけのものを輸入すると云ふ以外に、若し吾々が自分の働きに依つて外國から金を收得することがあるならば、其金額の範圍に外國から物を買ふも宜しい、或は外國に投資して居る其利子であるとか、配當と云ふものは是は吾々の生産力の一部を代表するものである、さう云ふ金を取る範圍に於ては又物資を入れるのも差支ない、或は船を動かして外國から運賃を取る、保險業を營んで保險料を取ると云ふやうな、さう云ふ吾々の過去の貯蓄に依つて、或は現在の勞務の提供に依つて外國から得る所の金、其金の範圍に生活すると云ふことは無論結構なことであり、それは生産力の範圍であります、さう云ふ意味に於て吾々が實際に働き出して得た所の品物或は働き出して得る所の金の範圍に生活することが出来れば、是は自給自足の生活であると云ふことは無論異議の無いことであります、どうしてもそこに吾々の生活の状態を、國家としても個人としても置かなければならぬと云ふ譯であります。

それならば吾々の國民經濟の現状はどう云ふことになつて居るか、吾々の國民の生活が果して國民經濟の全生産力で賄うて居るか、是は諸君も十分に御存知のことと思ひますが、極く簡単に日本の貿易狀態をお話申し上げます。

すと、吾々は明治の初年から歐洲大戦争の開始されます大正三年迄の間に今の自給自足の生活をした期間と云ふのは、私の調べに依りますと明治十五年から同二十五年迄、十ケ年の間だけが吾々の生産したる品物の範圍に於て外國から品物を入れた、即ち我國の貿易上輸出超過を見ることが出来たのは、歐洲大戦争に至るまで明治元年からの長い間に、僅かに明治十五年から其後十年間に過ぎないのであります、明治の初年から十五年位迄の間は、日本は輸入超過を年々續けて來たのであります、是は已むを得ないことであつて、始めて日本が世界各國に向つて交際を始め、さうして西洋の文物を入れて、國を開いて産業を興したと云ふ時代でありますから、輸入超過を致したのは外國の物資を入れ、外國から機械其他のものをに入れて日本の産業を開發すると云ふ爲めであつたのであります、併し其間に我が國民經濟の發展は相當になし得たのであります、其の結果が其後十五年以來十ケ年間は年々輸出超過となつたのである、我が國の産業が大いに發展した結果であります、所が御承知の通り日清戦争の結果三億何千萬圓と云ふ賠償金を貰つて、其金を以て産業の開發に費したのであります、産業の開發に費した結果産業が興つたか知れませぬが、非常に外國の物資を澤山入れることになつたのであります、其爲めに我が國の輸入超過は、年々殖えて參りました、其後日露戦争の爲めに非常に金が必要でしたが他方に年々巨額の外債を募集して、其後段々國力は發展して行くが産業が之に伴はない爲めに、輸入超過はどうしても止まない、結局大正三年迄年々輸入超過を續けて來たのであります、大正三年に歐洲大戦争が始まりまして、其後の事は皆さんも能く御存知のことと思ひますが、我國は僅かに戦争の初期に一寸參加しましたけれども、實際には戦争の慘害も受けずに、さうして其間に西洋の各國が非常に澤山の物資を要求した爲めに、それ等を供給する爲めに盛んに輸出をした、どちらかと云ふと日本は輸出を爲し過ぎたと云ふ位迄輸出を致したのであります、さう云ふ譯で歐洲大戦争の間に十四億四千萬圓だけの輸出超過を致すことが出来たのであります、此十四億四千萬圓と云ふの

は、もう歐洲戰爭前には殆ど日本の財力が枯渇しつゝあつた時代ですが、其時に非常なる利益を得た譯であり、是は實際物資の輸出から生じたる收益でありますが、其外に先刻お話申上げましたる海運賃等の貿易以外の受取勘定として、大正三年から以後昭和二年迄の間に三十四五億圓の收入を得たのであります。それで貿易關係に於ける輸出超過と、貿易以外の受取超過勘定に於きまして、戰爭開始以來先づさつと今日迄四十八億圓乃至四十九億圓位の收入を得たのであります。此四十八億圓と云ふ金は、若し吾々が之を適當なる方法を以て處分して行くことが出来たならば、今日の我が國の經濟狀態は餘程變つて居つたであらうと思ふのであります。所が御承知の通り大正八年に戰爭が濟みました後直ちに日本の貿易は輸入超過になつたのであります。それ等の原因は或は大正七八年頃非常な好況に依つて、日本の物價が段々高くなり、物價が高くなるばかりでなく我が國民が不時の收入を得ましたから、所謂成金氣分と申しますか、個人經濟に於て非常に贅澤になつた、それ等の爲めに輸入を多くしたと云ふことになりましたが、結局大正八年から昭和二年迄に輸入超過の總額が四十億圓に達したのであります。それで戰爭以來貿易上又貿易以外の關係に於て四十八億圓の收入を得たのでありますけれども、四十億圓の輸入超過を致し、其輸入超過の爲めに四十億圓だけは費して了つた、結局差引八億圓だけが残ると云ふことになつたのであります。果して是等の數字は正確かどうか分りませぬが、私共歐洲戰爭の始まります前に、日本の正貨は三億圓であると云ふことを言つて居ります。三億圓は少し切れて居ると云ふことを言つて居りましたが、兎に角三億圓位しか無かつた、それを其後四十八億圓儲けて四十億圓出して後に八億圓残つたのであります。それから、戰爭前の三億圓と今の八億圓との合計十一億、或は十二億圓と云ふものが現在の正貨の有り高である。現在の正貨が十一億或は十二億圓と云ふ大體の數字はそこから出て居ります。御承知の通り一時日本では大正十年か十一年でありましたが、二十一億圓位の正貨を持つて居りました、それが今日十一億圓になつて居ります。

吾々は戦争以來巨額の利益を得たけれども、どちらかと云ふと輸入超過の大部分は浪費であります、國民が徒らに生活向上の爲めに浪費を致し、戦争以前から持つて居つた三億圓を加へて漸く十一億圓だけを残して居ると云ふ有様である、是は主として貿易關係のお話でありますが、これにて大體我國の經濟狀態の現状を想像することが出来るのであります。

吾々は今お話しました通り、輸入超過と云ふことが一番恐いことになるのであります、折角歐洲大戦争以來國民の努力を以て贏ち得たる財産も、直ちに輸入超過を以て消費して了ふと云ふ結果になりますから、輸入超過をどうしても止めなければならぬと云ふことが根本のことになるのであります、然らばどうして吾々はさう澤山の輸入超過をしなければならぬかと云ふ問題であります、輸入超過の根本の原因としては、先刻お話しました日本の國運の發展と云ふことゝ産業の開發と云ふことゝがまだしつくり合はない、國力の發展は日清、日露、歐洲大戦争と云ふやうな、大體に於て戦争を一つの期と致して居りますが、其度び毎に非常に發展したのであります、日清戦争時分に漸く東洋の一國として認められ、日露戦争の時に世界に幾らか強國の仲間入りをしたと云ふのであつたが、歐洲戦争の時には三大強國の一つにも加へられると云ふやうな譯で、隨て國運の發展が非常に急激に來たのであります、然るに經濟の發展或は産業の發展と云ふものが之に伴はなかつた、それでどうしても經濟力の發展、國力の發展をする爲めに要する物資の供給と云ふことが輸入超過になるより外に方法がない、それから今一つは御承知の通り我が國は残念ながら天然の資源に頗る乏しいのであります、衣食住等の必需品、或は工業の原料、或は工業に要する機械其他であつても、之を輸入に俟つものが非常に多いのであります、先づ食料品であります、吾々は米を常食とするのであつて、米は日本で出来るのでありますから、食料品は自給自足が出来るやうに思はれるのでありますけれども、日本に出来まするだけの米では、日本の消費には不足であります、そ

れならば米の生産額はどれ位あるかと云ふと、過去五ヶ年の平均を取つて見ますれば五千七百萬石生産して居ります、昨年は六千萬石以上でありますけれども五ヶ年の平均を取つて見ますれば五千七百萬石であります、さうしてどれだけ消費致して居るか、是も五ヶ年平均でありますが、一人當り一ヶ年に一石一斗二升八合、全體の消費高が約六千七百萬石であります、さうすると平均致しますると一千万石だけ足らないのであります、固より米は年々三百萬石或は四百萬石と云ふ前年度からの持越があるものであります、それ等を引きまして、それから又朝鮮、臺灣等にも米が出来るのであります、何れにしてもそれ等の總てを計算に入れました、年々輸入致しまする米は平均七千萬圓位であります、是も五ヶ年の平均であります、所が食料品として、輸入するものは米ばかりでないのであります、其外に小麥、大豆、砂糖此三つのものは皆相當の多額の輸入を致して居ります、小麥、大豆、砂糖が各々六七千萬圓の輸入を毎年やつて居るのであります、是も大概私のお話するのは過去五ヶ年の平均を標準と致して居ります、さうすれば食料品の全部で三億三千三百萬圓年々輸入して居る、所が食料品と致しましては實際に食料に使ふものだけではありませぬ、此外に米を作り、麥を作る爲めには肥料が要るのであります、此肥料である油粕、硫酸アンモニアさう云ふものゝ輸入が一ヶ年に一億五六千萬圓要るのであります、さうすると食料品關係は全體で四億九千萬圓だけどうしても輸入しなければならぬ、食ふ爲めに先づ大體五億圓の輸入を要するのであります、是は過去五ヶ年間の平均でありますから、吾々は是非共食ふ爲めに五億圓位は外國から取らなければならぬと云ふことを考へて宜いのであります。

次には着物であります、一番澤山な着物の原料は勿論綿花であります、如何に贅澤な人でも殆ど綿花を身に纏つてない人は無い、此頃は毛織物が流行る、或は贅澤な人は絹を着ますが、木綿と云ふものは有ゆるものに混用されて居る、朝起きて顔を洗ふにもタオル、手拭、悉く木綿であります、此く吾々の衣服其他日常要する所の綿

布其の他綿製品は非常に多量に要るのでありますが、其の原料たる棉花は悉く支那、印度並に亞米利加から輸入致して居る、棉花の輸入は是も五ヶ年の平均で申しまして一ヶ年六億七千八百萬圓、一番多い時は確か大正十四年であつたと思ひますが、九億圓以上の棉花の輸入を致して居ります、兎に角五ヶ年の平均で六億七千八百萬圓と云ふことでありますが、是も吾々は着物を着るには居られないのでありますから、どうしても外國から買はなければならぬ、日本では吾々の着物に用ゐるに足るやうな棉花の生産は、現在は固より將來に於ても中々容易に得られるものでないと思ふのでありますから、是はどうしても輸入を要するのであります。

其外に段々洋服が盛んになれば毛織物の輸入が非常に多くなる、今日は日本に於て毛織物が出来るのであります、併しながら其原料の羊毛は悉く外國からの輸入であります、是は主として濠洲から參るのでありますが、斯う云ふ毛織物の原料である羊毛、其他の毛織物等の輸入が是又相當の金額に上ぼつて居ります、それで衣料品を全體合せますと九億七百萬圓になる、棉花、綿布、羊毛、毛織物等を加へまして、總て吾々の着物に使ふものと推定されるものゝ平均の輸入が九億七百萬圓、斯う云ふことになつて居ります、尤も茲で一つ考へなければならぬのは、輸入の棉花と云ふものは、全部吾々の着物に使つて居る譯ではありません、其中から之を綿糸にしまして、或は綿布にしまして外國に輸出するものが相當多いのであります、それで斯う云ふ輸出の綿糸布に使ひます棉花と云ふものは、是は外國からは入つて來るが、綿糸布となつて出るのであるから其金額は差引いて、吾々の衣料品に必要なものを算定しなければならぬ、其算定も中々正確には參りませぬ、併しながら私は先づ大體に於て輸出製品の原料棉花は二億七千萬圓、是だけのものは輸出に用ひられるものであると云ふ算定を致したのであります、それは少し大雑把の計算であるけれども、先づ棉花の一ヶ年に日本へ入つて參りますものを、綿糸、綿布にして四割位輸出して六割位内地で使つて居る、是は色々の統計を取りましたが、果して正確で

あるかは存じませぬ、併し一通りは實際を調べてさうして算定致したのであります、それで輸入棉花の四割だけが再び製品となつて外國に出ると云ふことになるのであるが、其四割と云ふのは五ヶ年の平均二億七千萬圓である、之れを九億七百萬圓から引けば六億三千万圓、此六億三千万圓は吾々の衣料品の原料として是非外國から年々買入れなければならぬと云ふことになります。

衣類に付ては吾々國民經濟上に面白い對象を爲して居るものがあります、それは生糸と棉花であります、御承知の通り日本の生糸は一年に、是も五ヶ年の平均でありますが、八億三千万圓位の生産があるのであります、其内一億二千五百萬圓位内地で使つて居ります、さうして他は悉く外國に出して居ります、それで生糸の輸出は一番多い時には、大正十四年でありますが、八億七千九百萬圓であつたのであります、過去五ヶ年間の平均では七億二千二百萬圓、其外に屑糸、或は屑糸から造りました眞綿、或は生糸で絹織物を造つて輸出致しまするものが一億二三千萬圓ありますから、生糸と絹織物關係の全體の輸出は八億六千六百萬圓であります。

それで吾々は先刻お話ししました通り六億七八千萬圓の棉花を輸入して居るが、他方に生糸を澤山輸出しますから、衣料品の關係に於ては優に自給自足が出来て居る譯であります、兎も角も我が國の蠶糸業と云ふものゝ爲めに吾々國民全體が、立派に着物を着ることが出来ると云ふ狀況になつて居るのであります、其外生糸と棉花と云ふものは、一方は輸出の大宗とし他方は輸入の大宗とし非常に面白い關係を持つて居るのであります、生糸は御承知の通り分量の割合には非常に値の高いものである、それで少量の輸出をして隨分澤山の金を取ることが出来る。所が棉花の方は全く反對でありまして、極く是は大量貨物であつて値は安い、生糸は殆ど全部が勞力の所産だと言つて宜い位のもので日本として大變有難い生産物であります、桑や其他經費は要しますが、農家の副業とし、子女の手間を以て一年に八億六千万圓からの輸出に達して居る、他方棉花は分量に比し値の安いものであり

ますが、それに少し加工をすれば非常に必要な品物になり又外國にも輸出することが出来ると云ふものでありますから、此生糸と棉花と云ふものは、一方は輸出品として理想的なものであり他方は輸入品として理想的なものである、少くとも我が國に於ては生糸は輸出品として理想的であります、棉花も輸入原料としては日本にとりては都合の好い輸入品であります、只此所に問題となるのは、一方生糸の方は先づ大體に贅澤品であるが、棉花はどうかと云ふとは必要品であります、綿糸布は日本國民の經濟上是非共なければならぬ必要品であります、必要品を輸入して贅澤品を輸出して居る、贅澤品は外國に於て需用が無くなることがあるかも知れませぬ、棉花は日本には出来ないが、どうしても是は外國から入れなければならぬ、それで此點に於て生糸が理想的の輸出品であり、それから棉花は日本に都合好い輸入品であると云ふ關係を一寸裏切るのであります。

併し我國の生糸の殆ど全部は亞米利加に輸出されるのであります、さうして其亞米利加はどう云ふ國かと云ふと、非常に經濟の發展致して居る國であります、贅澤な國民であります、それで絹糸で造りましたる所の女の靴足袋と云ふやうなものは、亞米利加には消費が無くなると云ふ時期は來まいと思つて居ります、殊に優良なる生糸が婦人の靴足袋に使はれるのであつて、其需用が非常に多いのであります、是も今日は人造絹糸が相當盛になつて居りますけれども、人造絹糸ではいけない、靴足袋は毎日或は一日置きに洗はなければならぬ、又た御承知の通り段々女の着物が短くなつて靴足袋の大部分は街頭に曝されて居るのでありますから、人造絹糸などで造つたものは中々穿かない、それから帽子のリボンであります、是も亦最優等の生糸を使はなければならぬ、節でも少しあれば直ぐ分かる、それで今日の亞米利加の經濟狀態から云つて、生糸が亞米利加に出なくなるやうなことはないと思ひます、併しながら近頃人造絹糸の發達は非常なものでありまして、日本で從來出来て居りました人造絹糸でも中々良く出来て居ります、洗つても左程損じなくなる、餘り厭な艶もない、餘程細い糸も出来

て居ります、所が最近でありますが私はペンベルグ會社で出来た人造絹糸を見たのであります、それは今迄のウ・ス・コスの方法で造つたものと比較して見ますと非常なる進歩であります、其ペンベルグの方法で造つた糸で編んだ女の靴足袋を見たのでありますが、離して見ましたならば天然絹糸で造つたものと殆ど同じであります、一緒に列べて見れば多少違ひますが、併し不用意な方には天然絹糸で造つたのと、ペンベルグ會社の人造絹糸で造つたものと比較して、區別が一寸分らないやうに出来て居ります、段々さう云ふ風に人造絹糸も發達して來れば、多少の脅威となる、日本の生糸に對して非常な競争相手になると云ふことも無論考へなければならぬ、併しまだ今日の技術では、ペンベルグの方法で出来ます人造絹糸は相當値も高いのであります、併し是は技術の進歩に依つて段々安くなるのでありませうから、そこらを考へて少くとも日本の生糸がそれ等のものから値段が抑されて價格が安くなると云ふことはどうしても覺悟して居らなければならぬ、それは似寄つたものが段々良くなつて來れば矢張需用が多くなる、若しも値段の差が餘りなければ、矢張天然絹糸の方が良いから天然絹糸を使ふが然し値段が餘りに差があれば寧ろ人造絹糸を使ふやうになる、それで對抗上日本の生糸の値を下げて、さうして需用の減退を防ぐやうに將來はどうしても覺悟をしなければならぬ、それで現今の如く一ヶ年八億六千萬圓の輸出をして之に依つて國民全體が着物を着て居ると云ふ狀態も、必しも樂觀は出來ない、今直に生糸の輸出は止まると云ふやうなことはないけれども、値段が段々安くなれば、輸出の數量は同様であつても、收入の金額が少くなるから、どうしても吾々は蠶糸業の開發と云ふことに付ては餘程考へなければならぬ、糸の性質は益々天然絹糸の特色を發揮して、人造絹糸の發達するに連れて天然絹糸も品質を改良して行き、さうして生産費を安くして生糸の値下りがあつても引合ふやうにして行かなければならぬと思ひます。

今衣食の必需品に付て、吾々が外國から輸入致して居るものに就てお話を致したのであります、衣食以外の

必需品と云へば、衣食住と云ふ中の住であります、是は貿易の統計等を調べて見ましても、直接住に關する輸入品と云ふものを、特に拔出して計算することが頗る困難であります、只衣食住以外の生活の必需品として木材其他の建築材料品、斯う云ふものはありますが、それが平均一億一千萬圓の輸入であります、其外木材、建築材料以外に尙ほ工業用として、或は其他の生活用として必要な鐵であるとか、機械類と云ふものを見てみますると、それは二億四千二百萬圓此二つの合計の三億五千萬圓は大體衣食住以外の必需品であると見得るのであります、さうすると今迄お話しました衣料品として六億三千五百萬圓それから食料品として四億九千二百萬圓、それから衣食以外の必需品として三億四千萬圓、全體で十四億八千百萬圓になるのであります、約十五億圓と云ふものは吾々の衣食住等の生活必需品として外國からどうしても年々輸入しなければならぬ、さうすると是は全輸入のどれ位になつて居るか云ふと、日本の輸入總額は五ヶ年平均に致しまして一ヶ年二十三億千四百萬圓であります、此中から十四億八千百萬圓を引けば残りが八億三千三百萬圓となります、此八億三千三百萬圓と云ふものが、吾々が今後輸入を減じて行く目標になります、衣食住の必需品は大體是は已むを得ない、其他の八億三千三百萬圓の輸入を防遏しなければならぬ、又別の方面から貿易品を分類致して、食料品、原料品それから製造品の三つに能く分けてあります、此三つに分けてある方法に依つて、吾々に必要である食料品、原料品を合計致しますと、是が十五億七千三百萬圓になるのであります、さうして製造品が七億四千百萬圓であります、さうすると輸入防止の目的は大體製造品にあると云ふことを知り得るのであります、どうしても衣食住必需品以外の八億圓、或は製造品の七億圓の輸入に就てどれが吾々に必要なものである、或は必要なものでもそれに代るべきものを製造し得るか云ふことを研究して輸入を防止するより外ないのであります、假りに一割を減じ得たとして七千八百萬圓二割にして一億五千萬圓となる譯であります。

輸出入貿易の内容に付きましては今お話しました通りであります、最近五ヶ年間を見ましても年々吾々は、多い時には五億圓六億圓の輸入超過をして居ります、五年間の平均に致しますと、内地で三億九千百圓の輸入超過であります、朝鮮、臺灣を加へまして四億八千七百萬圓と云ふのが平均一ヶ年の輸入超過の金額であります、尤も此中には震災後の復興材料等の輸入も含まれて居りますから、今日では段々貿易状態は改善されて内地のみでは大體二億圓程度に改善されて居る、併し震災後の状況から見ましても、歐洲戦争後の事情等を考へましても、日本には一寸何事が起れば輸入が直ぐ増すと云ふ是迄の傾向であります、それで輸入を防遏すると云ふ事は、どうしても吾々不斷の努力でなければならぬ、豫てさう云ふことをやつて居らなければ、何かの時には直に輸入超過が起るのでありますから、輸入防遏と云ふことに付ては、吾々は有餘の方面から常時考へて居らなければならぬのであります。

是迄お話しました様に一ヶ年約五億と云ふ輸入超過は、詰り我國民は一ヶ年百三十三億圓の生産力が有るのに對して、一ヶ年百三十八億圓の生活をした、斯う云ふことに言ひ得られるのであらうと思ふのであります、一人當りに二百十七圓と先刻お話致しましたが、二百十七圓の所得をしたのに對して二百二十五圓位の生活をして來た譯であります、どうしても吾々の生産力よりも三分五厘乃至四分位は生産力以上の生活をしたと云ふことに考へて差支ないと思ふのであります、併し四億八千萬圓の輸入超過と申しますが、先程からもお話して居る貿易以外の受取勘定は、過去五ヶ年間に矢張相當ある、貿易外の受取勘定は皆さん方は統計を御覽になれば分りますが、經常の收入と臨時の收入と分れて居ります、經常の收入と云ふのは項目は澤山あるが、主として運賃收入でありまして、其外には海外の投資、海外の事業より生ずる所の利益、配當等であります、それから外國に出稼する移民が日本に送金するもの等が主なるものであります、是が經常收入であります、其の五ヶ年平均は一ヶ年の受取

超過額一億五千七百萬圓であります、是だけは吾々の生産力の一部を代表致して居るから、今の四億八千七百萬圓から此一億五千七百萬圓だけは引去り得る譯でありますけれども、之を引きましても尙ほ三億圓以上の不足を年々見て居る、其結果日本の外債が段々多くなりまして、國家の外債は是は戰爭以前既に十五億圓に達して居る、今日も十五億圓程度でありますけれども、民間の外債が其後年々發行されまして、今日は國家の外債と民間の殊に主として電力會社のものであります、其外少數の地方團體の外債がありますが、それ等を合せますと二十億圓以上に達して居る、此二十億以上の借金をすることになりましたのは、今のやうな吾々の生産力以上の生活をして、今日に於ても年々三億圓位の生産力以上の消費でありますから、どうしても借金するより外ない、或は吾々が今日迄溜めて居つた金貨を出すか、或は借金をするか此二ツの方法より外ないのであります、一時二十一億圓以上もあつた正貨が今日は十二億圓以下に減り、それから外債は二十億圓にもなつて居ると云ふことが、今日迄の我國の經濟の推移を語るものであります。

それで今迄申しましたやうな、生活の必需品、衣食住の必需品から或は製造業工業の原料品等に至るまで、日本はどうしても輸入に俟たなければならぬ、併し斯う云ふ借金生活はどうしても長く続け得られないと云ふことは分つて居る、さう何時迄も借金政策でやつて行くことが出来ない、二十億圓の外債であるならば利拂ひだけでも一億圓の支拂をしなければならぬ、内外債を合せますれば、五十七億圓であります、是等の借金が色々な方面に影響して居りますが、内債の問題は暫く措きましても日本の國家の外國からの借金は十五億圓、民間の借金が五六億圓であるから此利拂にどうしても一億圓以上を要して居る、さう云ふことを段々やつて行くと結局行詰まるより外ないから、何とか吾々は輸入を防遏する方法を考へなければならぬ、又一方には輸出を奨励して輸出の増加も圖らなければならぬ、何れにしても輸出を多くして貿易の均衡を得なければならぬ、吾

々の理想としましては輸出入の平均を得ること、尙ほ進んで輸出超過になることでありますけれどもさう云ふ一足飛びのことは今冀つても出来ないことでありますから、先づせめて先刻お話ししました貿易以外の經常的の受取超過金額である一億五千七百萬圓の程度に我が國の輸入超過を減じて行き、輸出の増進、或は輸入の防遏に依つて一億五千七百萬圓の程度に減じて行くと云ふことが、吾々の差當りの努力の目標であります、さうすれば今日は輸入超過は大體三億圓位になつて居りますからもう一億五千萬圓だけの節約をしなければならぬと云ふことに歸着するのであります、それで輸出の増進を計り、輸入の減少を來すにはどうしたら宜いか、是が今日日本の經濟上に於ける最も重要な問題であります、問題は頗る重大でありますから、到底詳細に申上げることもし難いし、又吾々の力でそれがどれ位迄成功し得られるかと云ふことも疑問であります、併し私は先づ最も着手し易い、或は成功し易い方面を能く調べて、さうして其出來得べきものから成べく早く實行して行くと云ふことが一番宜いと思ひまして、色々研究も致して見て居るのであります。

それで産業の振興に關する二三の事項として、私の考へて居りますことは、第一は地方的の産業をもう少し開發しなければならぬ、少くも開發する餘地もあれば、其必要もあるであらうと思ふのであります、私の申しますのは地方的の小規模の産業であります、同より大規模の産業も必要でありますけれども、小規模の産業は日本には比較的利益な條件があるのであります、小規模の企業と云ふことは、どれ位が小規模であるか、學問的には色々の問題がありませうが、早い話が名古屋に近い一ノ宮と云ふ所に行つて見ますと、彼處には毛織物の工場が非常に澤山あるのであります、あれを小規模と云ふことが出來ないか知れませぬが、中規模の工業であります、あゝ云ふ風の産業が一地方に非常に發展を致すと云ふことになれば、延いては日本全體の産業の上に非常に宜いと云ふことを切に彼處に行つて見て感じたのであります、それから各地方で、何かの機會に、其時々の知事

であるとか或は舊藩主であると云ふやうな人達が、獎勵をして起した所の事業が、中々能く發達致して居るのを見るのであります、矢張是は各地方々々で其地方の状況を考へて中小の商工業を起すと云ふことが、我が國に於てはまだ餘程餘地があるやうに思はれるのであります、それで諸君が、例へば生糸の生産額に付て、各府縣を調べて御覽になれば大體分かるのであります、殆ど我が國全體に亘つて蠶糸業が行はれて居るのであります、所が其各地に於ても非常に能く發展して居る所は、それは多くは舊藩主であるとか、地方の有力者又は行政官等が率先して農民を説き、地方の人を説いて出來た事業であります、それで今少し各地方に人材が出て、各地方に人材が留まつて地方の産業經營をやるやうになれば、我が日本の産業の勃興には大に助けになると思ひます、段々世の中の生活の向上と云ひますか、或は經濟上又た社會的の自然の法則で都會に人口の集中するのは已むを得ないのでありますけれども、吾々の友人でありますも或は役人して居る、或は實業に従事して居ると云ふ人は、それは相當の人は皆國を出て、東京であるとか大阪であるとか云ふやうな場所に働いて居ります、併しさう云ふ人達が職を罷めまして、尙ほ矢張東京大阪等にブラ／＼して、或は恩給で食つて居るとか食ひ溜めをして置いたのを以て生活資料としてやつて居ると云ふことが非常に多いのであります、是は色々の事情もあります、國に歸れば寄附金を取られる、税を多く取られると云ふ様な事情もあります、兎に角相當の官吏をした人或は相當實業界に働いて居つた人は皆東京大阪等の大都會に居る、さう云ふ都會に一度出た人でも職業を離れたら國に歸つて、地方青年の指導に當る、或は地方産業の開發に努力したならば、日本の地方産業はもつと發展するのではないかと思ふ、それで諸君の中で相當な資産も在るゝ方は、大學教育を受けられた相當の人達であるから、地方に歸つて地方の産業開發に努力せらるゝと云ふことも極めて意義あることではないかと思ひます、今日の人は學校を出て官吏になる、或は實業家となる、實業家と云へば何かと云ふと大會社、銀行のサラリーマンである、

それよりも私は地方に歸つて、地方開發に任ずると云ふことは、餘程意義あることではないかと思ふのであります、大會社、銀行の今日の狀態を御覽になれば分かるのであります、毎年學校の卒業生が就職の爲めに百人二百人と押かけて行つて二人か三人しか採つて呉れませぬ、幸に採用せられて入つて見ても僅かな月給で、先づ生活の保證を得るまでには二十年以上かかる、さう云ふことを諸君が能く考へて、少し財産でも有る方々は國にお歸りになつて、地方産業の開發に従事されることを希望して、止まないものである、單に日本の産業の開發の爲めばかりでない、今日の我國の政治が、總て政黨本位になつて殆ど國民生活、國民經濟と云ふものを十分考へて居らない、さう云ふことが地方に人材が澤山居れば、中央の政治が國民經濟に適合しないやうな政治をすると云ふやうなことはやれなくなる、地方から牽制することが出来る、何となれば今日の中央政治の最も恐れをなして居るものは地方の選舉地盤であります、地方の選舉地盤にももの分つた人達が居つて、さうして國民生活の實情も能く知り、日本の産業の方針も能く辨へた人達が各地方に於て事業をやつて居れば、中央で所謂地方の愚民を瞞着するやうな政策を執ると云ふやうなことはやれなくなる、矢張本當に日本の國民經濟に合ふやうな政治をやらなければならぬことになる、地方に於ける人材の配布が中央政治のさう云ふ悪いことを牽制する上に於ても非常に宜い、延いては經濟問題ばかりでない、社會問題に付ても、政治問題に付ても非常に堅實なる基礎が出来ると思ふのであります、是が私の諸君に地方にお歸りになつたら如何と云ふことを申上げる一つの理由であります。

それから次に考へなければならぬことは、産業の發展と云つても、矢張どうしても日本の國情に合ふ産業でなければならぬ、吾々が近代的の産業組織によつて各種の産業の經營を始めましてから相當の年月を経て居る、それで二三十年と云ひますか、或は四五十年と云ひますか、此間に大體我が國の國情に適合して居る産業が、どう云ふものであるかと云ふことは見當が付いて居る、其見當の付いて居る産業に全力を費すと云ふ事を考へなければ

ばならぬ、然らばどう云ふものが日本の國情に最も適當して居るか、是は先づ第一には纖維工業であります、先刻來お話して居る紡績事業である、人造絹糸の工業、蠶糸業、毛織物の工業等であります、さう云ふ纖維工業の内で單に紡績事業に就て申しますれば日本の紡績業は御承知の通り歐洲大戰爭中に大なる利益を擧げまして、其爲めに資本の消却が非常に能く行はれて居りますから外國との競争に能く堪へ得る様になつて居ります、其外に日本は亞米利加、支那、印度と云ふやうな棉花の主産地との地理的關係から、此等數種の棉花を能く混ぜて、所謂混綿と申しますが、棉花を混用する特殊の技能を有して居ります、是は外國の紡績業に比して日本の紡績業が抽でゝ居る一つの大きな有利の點であります、此資本の消却が出来て居ると云ふことゝ、それから混綿の技術に長けて居ると云ふことの外に、今迄のは大體紡績業の特殊のことではありますが、廣く纖維工業全般に亘りましては、日本の女工が是等の纖維工業に適して居ると云ふことであります、我が國の婦人は、大體西洋の人に較べまして頗る丁寧温順である、殊に注意深い作業には適して居る、手先も頗る器用である、それから生活費用も極く少くて、低廉の賃銀で相當の能率を擧げて居る、斯う云ふ色々な事情から日本の女工と云ふものが、纖維工業には非常に適して居る、それから製糸業の方で云へば原料繭は、殆ど農家の副業であるし、養蠶より製糸に至る迄多くは子女の手に依つて居る、兎に角賃銀は低くて、併し極く緻密なことを要するものである、それから多數の人が要る、斯う云ふ纖維工業でありますから、さう云ふのに最も適當して居る女工を持つて居る日本には纖維工業が最も適して居ると云ふことを云はなければならぬ、私が先刻來お話して居るやうに、日本の生糸は八億二三千萬圓も外國に出る、紡績事業はどう云ふことになつて居るかと云へば、日本に少しの原料もない棉花を使つて、さうして日本人全體が着る所の着物を造るばかりでなく紡績事業に依り年々輸出して居る綿糸布綿織物は四億圓以上になつて居る、斯う云ふことは、矢張今私がお話しましたやうな特徴が日本にあるからであります、決

して故なくしてそんなに發展するものでない、外國より非常によい條件が備はつて居る、兎に角日本の棉花の消費額は、世界中で英吉利、亞米利加と匹敵致して居る、或る年は日本が二番位の消費をしたことがあつた、亞米利加の次が日本であつたこともあつたと思ひます、何れに致しましても世界の棉花の産地である亞米利加、或は紡績業で世界一と云はれまする英吉利と匹敵して、日本が棉花の消費をして居ると云ふことは、決して見通すべからざることで、益々此方面に吾々は發展して行かなければならぬ、固より蠶糸業の方も大いに努力しなければならぬが、紡績事業は是亦世界的の事業である、世界に必需品を供給する事業でありますから、吾々は値が安くて質の良き物を造ればまだ々々發展の餘地が充分にあります、是等の事情から今後纖維工業の發達には、吾々充分の努力を爲なければならぬ、諸君も是等の意味に於て將來紡績其他の纖維工業に従事せらるゝことを私は勧める所以であります、非常に見込のある事業である、又諸君が研究して益々發達せしめ得る事業であると考へて居るのであります。

次に吾々が特殊の事情を以て相當發展し得べき餘地のあると思ふものは美術工藝品工業であります、美術工藝品工業と云ふのはどう云ふものと云ふと、或は瀬戸物、或はガラス器、或は色々な裝飾品、巻煙草入とか、部屋装飾をするものとか、家財器具と云ふものゝ製造であります、此美術工藝品と申しますものは、原料の價ひよりも、努力を加へて製品となつた場合に、値段がずつと上つて来る、普通の工業品であるならば、原料品は僅かの加工を致して、さうして製品として出すが、其製品の價と原料の價の開きと云ふものはさう澤山ない、相當にはありますが、併し原料の代金と云ふものは大體に於て大部分を占めて居るのであります、所が美術工藝品に至つては、原料の價よりも、物に依つては數倍、數十倍、或は數百倍の價を出し得るものであります、象牙細工の如きは原料は僅かの價でありますけれども、それを非常に緻密なる加工を致しますると非常な價が出るもので

あります、其外寶石類、金銀に色々の加工をする、或は象眼すると云ふやうなものは悉く左様であります、それで日本のやうに天然資源の少い國では、どうしても原料を成べく少く使つて、さうして吾々が澤山持つて居る勢力を加へ、さうして値段を高くして賣ると云ふことをやるより外に方法がない、それで理論的に申して原料の少い日本では原料の價よりも非常に高く賣れるやうな加工をして賣れるものに全力を集中して出すと云ふことが當然であります、實際から見ても日本人には美術工藝品工業に適當したる資質が多分にあるのであります、先刻來申しました手先の器用であると云ふのは其一つであります、日本人のやつた程外國人は精密な美術工藝品が出来ない、此手先の器用であると云ふことゝ、矢張東洋には東洋獨特の美術眼があります、美術思想があります、其美術思想を應用して造る、之を外國に持つて行つて必ず賞讃を得ると云ふものがあるのであります、今後大いに發展する餘地があるのであります、只併し美術工藝品の多くの物は家庭に於て、裝飾或は實用に使はれる、それで吾々が外國に行つて居つて日本から來る美術工藝品に付て何時も感じますことは、東洋の美術眼を旨く應用し、或は日本人の器用なる手先を以て巧妙に造られて居る點には遺憾ないと思ひますけれども、どうしても西洋人の生活様式にピッタリ合はない、それは吾々の生活は御承知の通り疊の上に座つて、さうして總てのものを使ひ、總ての物を見て居ります、それを西洋人は椅子に座つて使用して居る、椅子に掛けて見て居るのであります、それに部屋の具合も異なつて居る、従つて日本の品はどうしても力が足りない、どこか間が脱けて居る様に感ぜらるゝ、何れにしても西洋人の生活様式にピッタリ合はないやうであります、それで日本の美術工藝品の輸出を充分に發達せしめる爲めには、日本の生活様式を椅子式に改めねば徹底しないかも知れませぬ、併し是は將來の問題としては大に考慮す可き問題だと思つて居りますが、當面の問題として實行が殆ど不可能と思ひます、日本の生活狀態を直ちに西洋式の椅子に變へると云ふことは經濟上の理由もあつて困難であります、然しそれ

等の點を吾々はもう少し研究して、さうして美術工藝品を造つたならば、もつと餘計外國に輸出することが出來ると思つて居ります、今日日本の美術工藝品で外國に能く出ますものは陶磁器であります、名古屋にも輸出向の陶器が澤山に出來ます、京都邊りからも随分出て行くと思ひます、それに次いではガラス器具、或は美術工藝品とまでは云へなくともこれに近いものは玩具であります、斯う云ふものがどの位出て居るかと云ふと、陶磁器の一ヶ年の輸出は三千萬圓乃至三千五百萬圓であります、それからガラス關係のものが千五百萬圓位で玩具が千萬圓、先づ是等のもので五六千萬圓しか出るものがあります、其外小さいものは色々ありますが、殆ど獨立のものとして統計に上げ得られるものがないのであります、即ち陶磁器の三千五百萬圓、ガラス其他が千五六百萬圓、玩具が千萬圓で、先づ六千萬圓にしかならない、斯う云ふものが段々發達しまして、是か一億圓になり、一億五千萬圓になると云ふことはそんなに無謀な計畫でないと思ふ、必ず其位は努力次第に依りましては發展が出來得ることと思はれるのであります。

尙ほ日本の天然資源に乏しい狀態から申しまして、今度は原料無しの工業品を造るならば一層宜いのであります、即ち無より有を生ずる工業は最も望ましいことであります、無より有を生ずると云ふことは決して有り得ないことではない、現に御承知の通り空中の窒素から窒素肥料、硫酸アンモニヤを製造することは、是は全く無より有を生ずるので、斯う云ふ事業が日本に發達するならば、原料がない、天然資源に乏しいと云ふやうなことは餘り心配は要らない、結局化學工業であります、慾を云へば獨逸のやうに染料工業等が發達すれば、是は原料は要らぬではありませぬが、殆ど廢物見たやうなものを使つて、石炭の滓などから立派な染料が出來るのであります、斯う云ふ化學工業が日本に出來るならばそれは最も望ましいことである、而して之には最も技術の頭が必要である、それと共に職工の熟練が必要である、日本人の頭は外國人の頭と較べて、部分的にはさう劣つて居るや

うに思はぬ、併し全體的として比較して見ると、どうも實際は劣つて居る様である、個人と個人が太刀打して見ますれば外國人に餘り敗けない、所が全體として見ると日本人は敗けて居る、例へば機械を作るのにも化學工業の製品でも多くは外國のバテントにより外國の様式を眞似てやつて居るに過ぎない、そこらの所は今後一層勉強して我國獨特の發明發見を期待するのであります、さうして化學工業を益々發展せしめなければならぬ、殊に鹽素工業の如きは肥料を造るのでありますから、一ケ年一億五千萬圓位の肥料の輸入を防退するには大變宜いこととであります。

第三には先刻もお話しましたやうに、吾々の生産力は必しも物資の生産ばかりでない、金を取る方面に働くと云ふことも矢張宜いこととありますから、海運業を發達させて外國から運賃を取り之を以て物資を輸入すると云ふことは大變結構なこととあります、日本人が海運業に對する今日迄の經驗から申しましても、日本の船長はどんな大きな船でも、どここの海へも行つて外國に敗けない、それから日本の水火夫は外國人に劣らないと云ふ所から云つて、又日本の地理的關係から云つて、それから日本の人口問題の解決、海上で生活する者が多くなればそれだけ陸上の人が少くて宜い譯である、又船に乗つて方々歩きます内に一寸上陸して見やうと云ふ譯で移殖民の機會も出來、獎勵にもなる、それ等の事も考へまして我國の海運業を益々發展せしめて貿易以外の受取勘定も益々多く得ることが出來れば結構な次第であります、海運關係の受取勘定は五ヶ年平均にして一ヶ年一億八千七百萬圓であります、今日より一割か二割の増收としても二千萬圓か三千萬圓になるのであります、それで此方面の發達を大いに考へなければならぬ、日本の汽船の總噸類は四百萬噸でありますが、英吉利は其五倍もあるのであります、亞米利加でも日本の三倍か四倍は有つて居ると云ふ次第でありますから、もつとく此方面に働かなければならぬ。

それから次には各種産業の經營方法を變へて、全體の産業の合理化を努めて行くと共に國產の獎勵をして行くことと云ふ事である、産業の合理化とはどう云ふことかと云ふと、結局各人の生産能率を擧げて安く物を造ると云ふことであります、それには生産組織を改めなければならぬ、或は販賣方法を新にし、機械の應用と労働條件の調和を圖り、是等の工夫によりて成べく一人の生産能力を擧げて行くと云ふことであります、或は生産品の規格を統一し成べく之れを單純化して、さうして大きい工場を造つて大量生産をする、其爲めには會社の合同等も必要であります、或は組合其他の組織も必要であります、結局は有ゆる方法を講じて生産費を少くすると云ふ意味に外ならぬのであります、今迄商賣の原則と云ふものは、安い物を買つて高く賣ると云ふことであつたのであります、無論商賣の原則は今日も之に外ならぬのであります、併し大事業の經營は今迄のやうに安い原料を他より買込んで製品を最も高い時に賣らふと云ふ、場所と時との異なる關係を利用して儲けて行かうと云ふやうなことに精力を集中して、重役であるとか支配人であると云ふものは、皆如何にして安く原料を買つて、高い時に製品を賣つて行かうと云ふことに殆ど全力を傾倒して居つたのは今日迄の經營方法であります、併しそれは儲かる時には儲かるが、是は殆ど投機的の事業經營でありますから、損することも多いのでありますから損益先づ相殺して居ると云ふ位に過ぎないのであります、併し生産費を安くすると云ふのは、是は一度び生産費を安くすれば、其安くなつた割合は僅かであつても、是は永久に續くのであります、如何なる時でもそれが生産品に影響し、如何なる時でも、如何なる場所に於ても兎に角安く物が出來ると云ふことは、それだけ利益が多くなつて來る、今日の實況殊に日本の産業と云ふものは、段々濡手に粟と云ふやうな時代は過去つて、小さい利益を集めて行かなければならぬと云ふ時代にもなつて居ります、さう云ふ時でありますから一層其の感を深うするのであります、經營方法を改めて、さうして出來るだけ生産費を安くして行くと云ふことを目的に全力を費して、今

迄のやうにさう云ふ投機的の方面にばかり重點を注いで居つた經營を改めなければならぬと思ひます、又今日は段々日用品に舶來品が良いと云ふやうな感じが少くなつたやうであります、まだ事業會社の使ふ機械器具と云ふやうなものは、中々技師の人は、多少危險もあるからでありませうが、今迄使ひ馴れて居る外國の機械を使ふと云ふことが多いのであります、是も今日は餘程日本で機械等が出來て居りますので、それ等のことは統計を調べて見ますれば意想外に旨く行きつゝあるのでありますから、も一つ努力をすれば現在輸入品に據つて居るものも日本品で賄ふことを得る様になるのは、決して出來ないことでないと思ひます、現に鐵の如きは今日は六割以上の消費は内地品で供給して居ると云ふやうな状態で、鐵の如き必要品がさう云ふ風に内地で六割以上生産が出來るやうになつたと云ふことは非常な進歩であります、益々國產品の獎勵をすると云ふことをすれば決してさう悲觀しなくとも能くはないかと思はれます、併し何れにしても前々からお話して居るやうに、日本は天然資源に乏しい所であり、餘程國民が努力しなければ、國民經濟の基礎を鞏固にして、吾々の生産力だけで生活して行くと云ふことが困難であります、産業の振興方面に就てお話すべきことは大體其位なものであります。

最後に輸出の増進は主として産業振興でありますけれども、輸入の防遏は大體に於て財政經濟の緊縮節約であります、一方に産業の振興を計ると同時に、吾々は全力を盡して國家並に個人の生活に於ける緊縮と節約を計つて行かなければならぬ、今日の我が國一般歲計豫算は約十七億五千萬圓であります、之を前に述べたる百三十三億圓の國民生産力、或は國民所得と較べて見ますと、約一割三分位に當つて居ります、其外に特別會計として色々なものがある、斯う云ふものに收支勘定の重複して居る計算を除きまして我國の國家財政は三十六億圓位の豫算を要して居る譯であります、其他地方團體の財政が十五六億圓を使つて居ります、中々國民の負擔と云ふものは重いのであります、それでどうしても斯う云ふ最大の消費者である國家の財政其他地方團體の財政を緊縮

すると云ふことにならなければ、如何に個人或は銀行會社等が節約をし、今のやうな生産費切下げ等に努力しても、其他に人件費などを節約しても、國家の財政が緊縮されぬ限りは、國民全體の節約緊縮はどうしても効果を
得られない、それで私共は出来るならば財政をもつとんと減じたい、理想的に云へば國民の全生産力たる百三十三億圓の一割十三億圓位に一般歲計豫算が緊縮し得らるゝものならば誠に結構であると思ひます、之にはどうしても軍備の問題と官業の問題に手を着けなければ、今の百十七億圓の財政を甚しく緊縮する餘地がない、行政整理による僅かな人件費の節約をした位では知れたものである、どうしても陸海軍々備の縮小を圖り、或は官業の整理を斷行しなければ我財政の根本的緊縮は出来ないであります、然し是は果して出来ることであらうかどうか、或は容易に行はれないことであらうと思ひます、併し是は國民全體が充分に考へて、國防を無くすると云ふことは出来ませぬが、國防の要求する範圍を能く研究して、さうしてそれに應ずる様に國防の要求する最少限度に軍備を減少することを考へなければならぬ、官業でも何も日本の鐵道を初め電信、電話等の總てのものを官業にして置かなければならぬと云ふことはないのであります、是等のことに就て今少しく政府の當路者も學者も又た實業家も十分研究をして、官業を整理して適當なるものは適當なる範圍に民業に移す様にすれば、雷に國家財政の一大緊縮となるはかりでなく、國民經濟上の能率を増進するにも大なる効果があると信じます。

其他の問題としては關稅政策であるとか、其他の産業政策を前申したやうな、日本に將來發展させなければならぬ産業に目標を置いて、それに應ずるやうに能く研究してやつて行かなければならぬと思ひます、それ等の詳細のことは餘り長くなりますので申上げられませぬが、何れにしても總て今お話申上げたやうな根本方針を立て、さうして産業の振興を圖り併せて財政經濟の緊縮節約を實行しなければならぬ、兎に角吾々が現在やつて居るやうな、年々二三億圓の借金をしなければ食へないやうな生活狀態を罷めて、總て實力本位の生活に歸つて、

國家としても個人としても、實力の有るだけで暮して行くと云ふことにならなければ、我財政經濟の根本的建直しは出来ない、斯う云ふ實力生活に歸ると云ふことには、吾々の目の前にブラ下つて居る問題も澤山あるのです、彼らの金解禁問題の如きも、此根本方針から出て居るのであります、現在の様に金の輸出を禁じて、爲替相場の自然の調節を失つて居ると云ふやうなことをやつて居るから緊縮方針も徹底しない、又た産業の發展も出来ない、吾々は有ゆる方面に虚偽の生活をして居る、實力相應の生活に歸らなければならぬ、それには金の輸出禁止をして居つては、物價の調節、通貨の調節悉く人爲的で、自然の調節を妨げるのである、さう云ふ遣り方をして居るのは皆彌縫政策の一端である、どうしても吾々は多少の困難を將來に豫期しても、總て實力生活に歸つて行かなければならぬ、少くも今日の我が國の財政經濟の現狀に於きましては、さう云ふ方針で行くより外ない、實力生活に歸ると云ふ一つのモットーを以て、總ての事柄を處して行くと云ふことにならなければならぬと思ふのであります。